

Ⓞ 平成二十五年 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。

2 ①～④の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

□ 設問と解答欄は、解答用紙(全2の1)にある。

□ 次の各問いに答えよ。

問一 ①～④の()内の言葉を、その後の言葉につながるように正しい形に直せ。ただし、()内に示した字数にしたがうこと。

- ① 明日であれば、いそがしくは(ない 3字)う。
 ② もしきつい(ようだ 4字)、休んでもよい。
 ③ ここは山奥(だ 1字)あり、人がいるはずもない。
 ④ 先日のお返事をいただき(たい 2字)ございます。

問二 ①～④の傍線部の言葉の性質が同じものを、後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ① 彼と遊んでも楽しくない。
 ア 僕ならばそんなことはしない。
 イ 最近遊びに行つてない。
 ウ 父はお酒をぜんぜん飲まない。
 エ このごろ彼の姿を見ない。

- ② 上手に字を書ければいいのに。
 ア 彼みたいに速くは走れない。
 イ 他人から笑われたいようにしたい。
 ウ 昨日のことのように思い出されます。
 エ この魚は食べられる。

- ③ ペットに芸をさせる。
 ア 彼に荷物を届けさせる。
 イ 子どもにご飯を食べさせる。
 ウ 妹をこちらに来させる。
 エ 息子に飼い犬を散歩させる。

- ④ 彼はだれにでも親切だ。
 ア 校庭の桜がとてもきれいだ。
 イ マラソンのゴールはもうすぐだ。
 ウ 今彼に必要なのは勇気だ。
 エ まもなく雪になるようだ。

問三 ①～④の四字熟語について、例にならって誤りがあればその漢字を訂正し、誤りがなければ○を書け。

【例】「絶対絶命」 対 ↓ 体

- ① 疑信暗鬼 ② 言語同断 ③ 单刀直入 ④ 不和雷同

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人の手がまったく入らない森を原生林と呼んでいる。今日、私たちは身近に原生林を見ることはできない。地球上で原生林が残っているところは東南アジア、アフリカ、中南米などの熱帯とロシア、カナダ北部などの寒帯にほぼ限られているからである。

地球温暖化が人の暮らしをおびやかしているというニュースが茶の間に飛び込んでくるたびに非難を浴びるのは原生林の破壊である。森は自然災害の発生を防ぐ役割を果たしているが、

熱帯雨林はいろいろな種類の木がごっちゃやませに生育しているので、森の総合力という点で抜群に優れている。また、寒帯の原生林は飛び抜けて面積が大きく、気候条件が厳しいために、ひとたび森のバランスが崩れると、森が回復するためには長い時間がかかる。私たちが原生林が失われていることに憂いを抱いているのは、原生林こそ森の王者であるという思い込みがあるからだろう。

私たちの身近な森を振り返ると、人類が誕生して以来、人の暮らしが豊かになるにつれて、^①森はさまざまな理由で犠牲を強いられてきた。とくに熱帯と寒帯の間にある暖帯と温帯の地域は、人口密度が高く、生活水準も高いので、あらゆる手を用いて原生林が伐られてきた。しかし、原生林を伐った後に生えてきた二次的な天然林の中には原生林に優るとも劣らない森があることも事実である。

□ B、天然林に代わって急速に面積を増やしてきたのが人工林である。日本の人工林は全体の森の面積の半分近くを占めている。ところが木材貿易の自由化の影響を受けて生長がピークに達したとき木を伐るチャンスが逃がしており、年老いたもの、スギ花粉を撒き散らすなど、手入れ不足で森の中身が荒れているもの、そうした負の遺産を抱え込んでいる人工林が増えている。

環境問題に関心の高い人たちは、このような天然林への憧れと人工林への^aシツボウという複雑な心の揺れの中で、森の働きを高めるためには、どうすればよいかということを考えている。天然林と人工林との違いを少なくしようとして、天然林を人工林に近い森、あるいは、人工林を天然林に近い森に作り変えることが^bケントウされているのも、そのひとつである。

私はペルーのイキトスの郊外、マレーシアのイポアの郊外で熱帯雨林を改良しようとしている試験的な森に出会ったことがある。イキトスでは太い木だけを抜き伐りした森を改良するために、数メートルおきに森を伐り開き、そこに一列に地元の木を植えていた。天然林と人工林が交じり合う立体的な森である。イポーでは熱帯雨林を伐ってしまったら、地を使って、異なる年齢の木を順々に植える立体的な森を作ろうとしていた。

日本でもスギ、ヒノキ、マツなどの人工林を二段林に仕立てる試みが行われている。人工林といえれば同じ年齢の木の集団であるが、そうした単純な森を年齢の異なる木の集団に変えようとするものである。このような二段に仕立てた森を複層林と呼んでいる。

〔C〕、人工林を複層林に作り替えることは言葉でいうほど簡単なものではない。同じ土地の上に異なる木、用途の違う木を植えるのだから、木の育て方も別々になる。植林の費用もかさみ、コスト計算も複雑になるだろう。木を伐る時期が違うから、残す木を痛めないよう木の伐り方を開発する必要がある。第一そのような。テーマのかかる森をわざわざ作るだろうか。

ヨーロッパや北米などの温帯の地域では森に対する考え方が実利的であり、生物遺伝子を保存する森や貴重な植物群落の森などをノゾけば、森は常に人の手によってなんらかの改良が加えられている。

原生林を伐った後に自然に再生された森を二次林と呼んでいる。③ヨーロッパの二次林は暮らしの中に生育しているが、日本の二次林は暮らしの外側に置き去りにされている例が多い。森を大事にしようという気持ちはどの国でも同じであるが、森と一緒に暮らすのか、森と一線を画して暮らすのか、その違いは森の文化を作り出す分かれ目になる。

北村昌美は「東洋の森・西洋の森」の中で、森が好きということではヨーロッパ人も日本人も変わらないが、日本人は頭の中で森を好きと考えているのに対して、ヨーロッパ人は実際に森の中を歩いて好きと実感していることを指摘している。ヨーロッパでは都会のど真ん中に森が茂り、人は時間をかけてゆっくりと散歩を楽しんでいる。いわば散歩の文化を通して森の心に触れているのだという。

家の窓から遠い奥山の森を眺めて暮らしている人は、森に蓄えられているいろいろな可能性を文化の創造物として見ていない。自分から進んで森に手を出さなくても、森は自然に山崩れを防いでくれたり、川の流れを安定させてくれたりしていると思いつている。あたかも暮らしの外側の森を遠いところから推し測ろうとしているようなものである。

④いま、「人と森の共存」とか「人と森の共生」とかという言葉が躍っている。二〇〇三年あたりから政府。カンコウ物『森林・林業白書』にはこの言葉が頻繁に出てくる。都会の人が年に一、二回森に出かけ、森の中を歩き、山小屋に泊まれば、そのことが人と森の共存であるというような言い回しである。このようにして森を訪ねても、共存の入り口にたどり着くことはできたとしても、人と森との共存が成り立つわけではないだろう。人と森の共存の成果は、森を暮らしの近くに引き入れ、森を改造したり、森の手入れをしたり、人と森との交流を通して作られた森の風景そのものといつてよい。

(田嶋謙三『森と人間』より)

問一 本文中の空欄A～Cに入るふさわしい言葉を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア だから イ いっぱう ウ とりわけ
エ しかし オ あるいは

問二 次の文章中の空欄A～Cを、本文中の適切な言葉で埋めよ。ただしすべて二字である。

天然林と呼ばれるものには、人の手が全く入っていない〔A〕林と、〔A〕林が伐られた後に自然に再生された〔B〕林がある。また、人の手によって何らかの改良が加えられた森を〔C〕林と呼ぶ。

問三 傍線部①「森はさまざまな理由で犠牲を強いられてきた」とあるが、森が強いられた「犠牲」とは何か。それを説明した次の文の空欄を埋めよ。

人間が〔 〕ために、〔 〕こと。

問四 傍線部②「そのひとつ」とあるが、「その」が指示する内容を答えよ。

問五 傍線部③「ヨーロッパの二次林は例が多い」とあるが、森と人間の関わりにおける「ヨーロッパ」と「日本」の違いを次のように説明するとき、空欄A～Dを適切な言葉で埋めよ。ただしA・Cはそれぞれ十字以内の本文中の言葉を抜き出し、B・Dには「外部」「内部」のどちらかを入れよ。

ヨーロッパでは森と〔A〕ことを前提として、生活空間の〔B〕に森を取り込む。一方、日本では森と〔C〕ことを前提として、生活空間の〔D〕に森を置いている。

問六 傍線部④「いま、『人と森の共存』と躍っている」とあるが、筆者は、日本人はこれから森とどのように関わるべきと考えているか。それを説明した次の文の空欄を埋めよ。

筆者は、〔 〕ではなく、〔 〕と考えている。

問七 波線部a～eのカタカナを漢字に改めよ。

- a シツボウ b ケントウ c テマ
d ノゾ(けば) e カンコウ

④ 次の文章は、水上勉『ブンナよ、木からおりてこい』の一場面である。よく読んで、後の問いに答えよ。

ある日、トノサマがえるの子ブンナは、椎の木のてっぺんに登った。しかし、そこは鶯の巣で、傷ついた様々な動物たちが運ばれてきては、連れ去られていく。その様子を、椎の木の穴にたまった土の中で、ブンナはじっと聞いていた。

百舌がつけさられたときも、雀がつけられてゆかれたときも、かなしげに泣いた。その声と同じ声をへびもだしたのです。①ブンナには、へびが驚にくわえられて天へさかさにつるしあげられている光景がうかびました。しばらく、静かな時間がきました。鶯はへびを空遠くへもちさったとみえ、上にはもう、へびはいないようです。②ブンナは頭の上が急にあかるくなって、春陽がさしたような気がし、安堵とよろこびで胸がいっぱいになりました。

と、頭の上で、声がしました。おやと思いましたが、あまた鼠がのこっていたのです。鼠も、喜んでいるだろう、とブンナは思いました。ところが、なんとそれはやはり鼠にちがいありませんが、鼠はどういうわけか、このときまた、あのかなしい声でしく泣くのでした。

鼠さん……なぜ泣くのかね、あんたは、おそろしいへびがいままでそこにいて、死ぬ思いだったのちがうのかね。自分のほうが先につれてゆかれるとばかりA念していたのに、土へもぐりかけていたへびのほうが先にもつてゆかれて、ほっとしたのではないのかね。鼠さん、なぜ泣くの……。

ブンナはいきおいよく外へ出ていって、鼠をなぐさめてやりたかった。いや、へびがいなくなったことを、鼠ともにおどって喜びたかった。鶯がいかに、冷静に公平に判断したかもほめたかった。ところが、前にもいったように、ブンナは出てゆくわけにはいかないのです。いまからでもくわれるかもしれせんし、かりに、鼠に力がなくても、鼠はたすかりたいために鶯につげ口するかもしれせん。ブンナは、自分も穴にもどれてたすかったのと、鶯に先にもつてゆかれなくてよかった鼠のために祝福しながら、その鼠がなぜだか、しおたれて泣く声を、だまってきいているしかなかったのです。

ところが、やがて鼠は、びたりと泣くのをやめました。そしてもううごくこともせず、じっとそこにうずくまっているけはいでした。と、ブンナの耳に、鼠のなにかしぼり出すような声がしました。なにか苦しみながら、物を言っているようだ、とブンナは耳をすましますが、よくきこえません。ブンナは、鼠が死ぬのではないか、と③思っ、勇氣をだして、へびがひきだされたあと自然と土のたまってしまった穴の口を鼻さきであけて、顔をだしました。鼠がへりの隅にたおれています。ふるえながらなにかいっている。ブンナは、穴からとび出た。外には小雨がふっています。

「鼠さん、鼠さん」

ブンナはよびました。鼠はびつしよりぬれています。が、びくつとうごきをとめました。

「かえるくん、やっぱりいたのかね」

と、これが鼠のいった最初の声でした。

「はい、ぼく……地めんの中に」

とブンナはいいました。

「鼠さん、元気をだしてください……鼠さん……」

すると、鼠は手足を拝むようにあわせのぼして、

「かえるくん……きいてくれ」

といいました。ブンナはよつてゆきました。鼠はいいます。

「きみは、きいていたろう。ぼくが、鶯にへびを売ったのを……とさしたしたのを……おまえさんはみていたろう」

「いいえ、地めんの中にいたのでわかりませんでした」

とブンナはいいました。事実それはみえなかった。

「そうか。でも、なさけないことだ。おれというヤツは……自分がもうこんなザマなのにへびを先にくつてくれと鶯にさしだしていたんだよ」

「鼠さん、おかげでぼくは助かりました。礼をいいます。鼠さん、元気をだしてください。もうじき雨もやみます。夜がきたら、月も出ます。そしたら、また元気をだして……からおりてください」

「おれにはそんな元気はない……いちど失敗しているしね。かえるくん」

「はい……知っています。でもなんと失敗してもいいじゃないですか。なんどもやってみてにげられたらいいでしょう」

「みろよ、かえるくん。この傷だ。あいてて、こいつはいけねえ。なんだか耳なりがはじまった。おれは死にそうだ。ああ、これは、おむかえの音だ……かえるくん、おまえさん、よく地めんにもぐつておれたね。おれはここで死ぬよ……おりるのは、おまえさんの番だ……かえるくん」

「鼠さん」

「なあんも遠慮はいらねえ、おれは死ぬことで、いま、鶯に勝てるのだ。死んだヤツを鶯はきらう。おれのいっていることがわかるか。かえるくん」

「……」

「おれが死ねば、この土になる。からだはいつかくさって土になるんだ。おれやかえるくんが暮らしてた地めんと同じ土になるんだ。死んで土になるのはみな生きものの道だよ。鶯だつて百舌だつて。死ねばみんな地めんだ。だれがこの世にハクセイのように空にとまって死んでる動物をみたことがあるか」

「……」

「みんな死ぬときはいつしよ。土になりにゆくんだよ。その土になる途中で……かえるくん、おれのからだから、虫が出てくるはずだ。その虫は、やがて羽がはえて、空へとび立ってゆくだろう。かえるくん、きみは、それをくつて、元気なからだになりたまえ。そうして、おれの代りにこの木をおりるんだ。おれから出た虫をくつたきみが、元気になって、この木をおりてくれたらうれしい。そうしておれの仲間にも、おふくろにもあつてくれたら、おれがおれたこととちつともかわらないじゃないか。かえるくん、きみは、ぼくになるんだから」

「……」

「おまえさんが、おれのおふくろや兄弟にあつてくれる。おれがゆくのと同じことなんだ！ かえるくん、生きてるものは、みんなたべあつてなんやかやに生まれかわつてつながつているんだよ。わかるか、みんな誰かの生まれかわりなんだ。それでいいん

だ。それでいいんだ。^⑦かえるくん、遠慮せずに、おれをたらふくくいたまえ。そして、ここをおりて、おれのかわりに仲間にあつてくれ……」

鼠の声は、ひきしぼるように細くなり、やがて、両手足を合掌がっしょうするようになる。そのまま、からだをくの字にまげてこと切れました。

「鼠さん」

ブンナはさけびました。

問一 二重傍線部「百舌」・「雀」・「へび」・「鼠」に共通することは何か。それを説明した次の文の空欄を、五字以内の自分の言葉で埋めよ。

運ばれてきた「百舌」「雀」「へび」「鼠」はみな、であること。

問二 傍線部①「ブンナには、へびが鳶にくわえられて天へさかさにつるしあげられている光景がうかびました」とあるが、なぜ「うかびました」と表現されているのか。その理由を二十字以内で答えよ。

問三 傍線部②「ブンナは頭の上が急にあかるくなって、春陽がさしたような気がし」とあるが、なぜブンナはこのように感じたのか。それを説明した次の文の空欄を十五字以内で埋めよ。

土へもぐりかけていたへびが鳶に連れ去られ、から。

問四 本文中の空欄「A念」に当てはまる漢字を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 無 イ 信 ウ 観 エ 失 オ 残

問五 傍線部③「勇気をだして、へびがひきだされたあと自然と土のたまってしまった穴の口を鼻さきであけて、顔をだしました」とあるが、なぜブンナは「顔をだ」すのに「勇気」が必要だったのか。その理由を説明した一文を本文中より抜き出し、最初の五字を答えよ。

問六 傍線部④「なさけないこと」とあるが、鼠は何を「なさけないこと」と考えたのか。次のア～オの中から適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 傷ついて弱っていたへびが助けを求めていたのに、自分の命のためへびを見捨てて逃げたこと。
イ いくら死にそうであったからとはいえ、自分より弱いブンナに、みつともない姿を見られたこと。
ウ 椎の木のでっぺんから逃げだそうとしたが失敗し、結局このまま死ななくてはいけなくなったこと。
エ 自分はまだ死にそうなのに、鳶に食べられたくなくて、へびが先に連れていかれるよう仕向けたこと。
オ 弱い自分が先に死んでいくつもりだったのに、へびが連れて行かれ、先を越されてしまったこと。

問七 傍線部⑤「おれは死ぬことで、いま、鳶に勝てるのだ」とあるが、なぜ「鳶に勝」つことになるかと鼠は考えているのか。十字以内で答えよ。

問八 傍線部⑥「おれがゆくのと同じことなんだ!」とあるが、具体的にどうすることで「同じこと」になると鼠は考えているのか。本文中の言葉を用いて説明せよ。

問九 傍線部⑦「かえるくん、遠慮せずに、おれをたらふくくいたまえ」とあるが、鼠はどのようなことを願っていると考えられるか。それを説明した次の文の空欄を、五字以内で埋めよ。

ブンナが鼠の命をくれること。

算術の少年しのび泣けり夏

西東三鬼さいとうさんき

何故夏なのだろうと長いこと思っていました。最後にとってつけたような形も気になっていました。算術、今で言う算数が苦手であるという事柄だけの句なら、夏でも冬でもさして変わりはないはずです。

しかし、男の子を育ててみて、この「夏」が動かない季節であることを知りました。ついこの間まで子供だと思っていた男の子が、いつの間にか少年の体つきになっているのに気づくのは、ほかのいつでもない夏なのです。日に焼けた顔、むき出しになった腕や臍、汗を吹く首筋。それはもう幼児期のふくよかな肌ではありません。夏こそ子供の体が目に見えて成長し、変化してゆく季節なのです。

体ばかりではありません。この間まで泣き虫だった男の子が、ある時から親の前は勿論のこと人前で涙を見せなくなる。それが少年期に入った証拠です。さつきから難しい算数の問題に取り組んでいるこの子は、解けないことがくやしくて、自分がなさけなくて、ひそかに涙を拭っているのです。背を向けて声を殺して泣いている首筋や肩にもはや子供ではない「少年」を見出した父親の句です。

(西村和子『NHK俳句 子どもを詠う』)

*465字

*印の欄には記入しないこと。

受験番号

㊦

問一 ①

問二 ①

問三 ①

問一 ②

問二 ②

問三 ②

問一 ③

問二 ③

問三 ③

問一 ④

問二 ④

問三 ④

㊦	*
	*
	*

㊦

問一 A

問二 A

問一 B

問二 B

問一 C

問二 C

問一 C

問二 C

㊦

問一 *

問三 人間が

問四

問五 A

問六 筆者は、

問七 a

問八

問九

人間が

ために、

こと。

㊦

問一 *

問五 A

問六 筆者は、

問七 a

問八

問九

C

D

B

問六 筆者は、

問七 a

問八

問九

ではなく、

と考えている。

㊦

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

㊦

問一 *

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

から。

から。

から。

問四

問五

問六

問七

問八

問九

から。

㊦

問一 *

問九

問八

問七

問六

問五

問四

問三

問二

問一

㊦

問一 *

くれること。

こと。